



「歴史戦」に勝利を

英霊にこたえる会中央本部 会長 寺島泰三

本資料は「隊友」紙(平成二十八年八月十五日付)に寺島会長が「隊友会相談役」として寄稿されたものを一部加筆訂正したものである。

◎はじめに

昨今我が国周辺においては諸々の軍事的緊張が増大している。即ち中国の軍事力の強化と東シナ海における艦船航空機の活動の活発化、北朝鮮の執拗な核ミサイルの開発実験、極東におけるロシア軍の活動の拡大そして世界に拡散しているテロ活動あるいはサイバー攻撃等々である。

しかしこれら顕在化する事象と異なり、知らず知らずのうちに国を誤り、国を貶める戦い即ち「歴史戦」が繰り広げられていることを忘れてはなるまい。

◎架空の産物・南京大虐殺

平成二十七年十一月九日、南京大虐殺文書がユネスコ世界記憶遺産(世界の記録)に登録された。

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖国神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

新たな国立の戦没者追悼施設は、心ある多くの国民の声と力を結集して、断固阻止しましょう。

世界記憶遺産は文化遺産や自然遺産のように国際条約によって規定され加盟国が申請を行うといった権威あるものと異なり、個人でも誰でも申請できるという代物に過ぎないが国連といった場で登録された影響は小さくないといえよう。

そもそも南京事件は昭和十二年十二月、支那事変最中に生じたとされるが、当時蒋介石も国際世論も民間人の虐殺に関しては全くと云って良いほど論議を呼んでいなかったのである。

それが戦後所謂東京裁判の場に突如提起され、十分な証拠調べのないまま、三十万人の無辜の民を虐殺したとして松井石根陸軍大将が絞首刑とされたのであった。

しかしその後も昭和五十七年まで三十数年何の話題にもならなかった南京事件が中国において突如として論議を呼び、昭和六十年には南京大虐殺記念館が建設されるといったように徐々に拡大して今日に至っているのである。

もとより三十万人虐殺説には事実関係や根拠に乏しい架空の議論に過ぎないことは多くの歴史学者等の証明するところである。

しかしながら、我が外務省の公式見解では「日本政府としては、日本軍の南京入城後、非戦闘員の殺害や略奪行為があったことは否定できないと考えています」という曖昧な表現であり、甚だ遺憾に思わざるを得ない。

我が国の名誉のためにも毅然とした態度で事実を世界に発信し続ける必要がある。

◎「慰安婦問題」はどうなるか

また昨年末、日韓外相共同記者会見で慰安婦問題について「最終的かつ不可逆的」に解決されることを確認されたことは一応の成果であったが、朴槿恵大統領が失脚し、慰安婦問題をめぐる日韓合意の再交渉を公約に掲げた「共に民主党」の文在寅前代表が新大統領に就任したことで、この公約が白紙に戻る懸念さえある。

そもそも慰安婦に関しては戦中も戦後も話題になっただけでなかったのであるが、戦後三十八年も経った昭和五十八年、朝日新聞に吉田清治なるものが濟州島において二百人の女性狩りをしたというでっち上げ記事が掲載されたことに端を発して以来、日韓間の懸案問題となり、

平成五年には時の河野官房長官が軍の関与を認め、宮沢首相が数次にわたって謝罪を繰り返すなどの行為によつてますます問題化していったのである。

そして更に平成八年には国連の場においてクマラスワミ女史が日本は軍が二十万人の韓国女性を性奴隷としたとする報告がなされ、平成二十三年には韓国の日本大使館前に少女の慰安婦像が設けられるといったごとくエスカレートし、更には登録が見送られたものの慰安婦に関する記録が申請され、今後中韓、北鮮や比台などの国際連帯委員会を結成し四十万人を性奴隷にしたといった内容で再申請が図られようとしている。

まさに今や我が国は中韓から仕掛けられ「歴史戦」の真つただ中にあると云えよう。

而してこの不合理な戦いに勝利しなければ誇りある日本の未来はない。

◎東京裁判自虐史観を払拭せよ

私たち日本国民はこのような事実と乖離した暴論妄言に対しては官民挙げて国際社会に対し敢然として立ち向かわなければならぬ。

日本の誇りと矜持のためにそして英霊の名誉のために特に政府就中外務省の対応に猛省を

促したい。

そしてこの仕向けられた歴史戦に勝利するためには私たち自身正しい歴史観を保持することが何よりも肝要であろう。

それは取りも直さず所謂東京裁判によつてそしてウォー・ギルト・インフォームーション・プログラム(注1)によつて植え付けられた誤れる自虐史観を払拭することに他なるまい。東京裁判で東條大将が陳述(注2)した如く、マッカーサー將軍が米国上院議会で証言した(注3)如く、そしてフーバー第一八代米大統領が回顧録(注4)で述べている如く、大東亜戦争は決して侵略戦争などではなく、自存自衛のため止むを得ず立ち上がった自衛のための戦争であることが後世の史家によつて実証される日を期待して待ちたい。

西暦よりも長い二千六百七十有余年、連綿として百二十五代の天皇を戴く世界に誇るわが国の歴史を大事に後世に伝えて行きたいと願っているものである。

(注1) GHQによる日本占領政策の一環として行われた「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画」

(注2) 東亜は過去数世紀にわたつてロシアを含む欧米列強の侵略と、今世紀になつてソ連の

東亜赤化戦略にあい、日本は日本自体と東亜の民族国家全体のため、それらの侵略に對して防衛する必要があった。

(注3) 日本が中国大陸に進出したのは侵略戦争ではなかった、自衛のための戦争だった。

(注4) 回顧録の一節・当時、アメリカでは戦争の介入に反対する孤立主義的な世論が強かった。ルーズベルトは欧州戦線に参戦するために、日本を挑発し戦争に引きずり込んだのである。

「故中條会長のお墓参り」

杏の里・長野県千曲市森

「曹洞宗禅透院」へ

英霊にこたえる会 中央本部事務局

四月二十三日に開催した「第四十三回総会」も無事終了し、事後処置を終えた本会事務局では四月二十六日、故中條高德会長の「お墓参り」を実施した。(「逝去後八五四日」)

中條会長の故郷は長野県千曲市森で、この地方は杏が日本一で、一目十万本といわれる杏の花で知られ、薬師山の展望台に登れば花に埋もれた村を一望できる。会長は生前遺言で、お墓は杏の花の咲く故郷のお寺と決めておられ、ご

遺族は遺言どおり、杏の花が咲いた四月上旬に納骨された。

この地に杏がもたらされたのは元禄時代、伊予宇和島藩主・伊達宗利の息女豊姫が松代藩主真田幸道に輿入れをする時、故郷の風情を偲ぶよすがにと杏の種子を持参したのが始まりと言われている。

中條家は千四百年頃、越後国沼垂郡中條庄より起こり源頼朝麾下の武将・和田義盛の五男・義茂の長男・義資に発すると言われる。その後、中條家の先祖は上杉謙信の幕僚と成り、武田信玄との宿命の対決の前に信濃派遣軍先発隊長として信濃入りした。上杉家の古文書にある軍役帳にも七番目の武将として「中條景泰」の名が連れてあるところからも上杉軍において重要な地位を占めていたことがうかがわれる。

「お墓参り」は富田運営委員長夫妻、事務局の松橋博子氏と阪本泉氏、本会の協力者から川崎市池宗紘氏と小山市の藤沼則夫氏の六名。藤沼氏は七人乗りのワゴン車で自宅から直行。他の五名は上越新幹線で移動して上田駅下車して藤沼氏と合流、ワゴン車での「お墓参り」となった。

中條会長の眠られている曹洞宗「禅透院」の住職に挨拶後、墓前に献花して回向、英霊にこ

たえる会会長として二千七十二日間、その功績に思いを至し心から謝意を表するとともに、本会の行く末をしっかりと守りくださいと祈願した。その後、菩提寺のすぐ近くにある会長の生家に立ち寄り、お義姉さんにお目にかかり弔意を表した。

この日は曇り空で時々小雨に見舞われたが、念願の墓参を終えて清々しい一日であった。



【お墓参り】の一行(禅透院にて)

